「愛を追い求めなさい」
コリントの信徒への手紙一　12 章 31b 節～14 章 1a 節

　使徒パウロがコリント教会に手紙を送った大きな理由の一つは、「教会の一致」を願ってのことでした。教会が一つとなることがどれほど大切か。そして神さまが、どれほどそれを望んでおられるのか。そのことを切々と語っているのがこの手紙です。
　教会には、様々な賜物を与えられた人たちがいて、それぞれが素晴らしい賜物を頂いています。しかし、それらの賜物が活かされ、教会が一つとなるためには、それらすべての賜物を超える最も大きな賜物が必要であるとパウロは語ります。
　では、それは何か。それこそが愛である、とパウロは言います。愛がなければ、一人一人の賜物がどんなに尊くても、それらが活かされることはありません。教会が一つとなることは出来ないのです。だから、まことの愛とはどういうものか、是非それを知って欲しい。そういう願いをもってパウロは語るのです。

　「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」（4－7 節）。ここには、愛の特性について、肯定的な「愛はこうする」という言い方が７つと、否定的な「愛はこうしない」という言い方が８つ述べられています。
　ここで否定されている行為、ねたむとか、自慢するとか、高ぶるとか、あるいは礼を失するとか、これらは、人間が生まれながらに持つ愛の特性です。ありのままの人間の愛の姿です。愛しているからこそ、ねたむ。愛しているからこそ、恨みを抱く。愛しているからこそ、自慢する。愛しているからこそ、礼を失する。生まれながらの人間は、そのような愛しか持っていません。私たちが、神さまのことを知らなかったときに思っていた愛とは、そういうものです。

　では、まことの愛とはどういうものなのでしょうか。御言葉は続けて語っています。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」。これが、まことの愛だというのです。
　このまことの愛は、私たちが元々持っている愛ではなく、神さまから与えられる愛です。そして、この愛は、決して変わることがないとパウロは 8 節以下で語っています。この世のことは皆変わっていきます。しかし、この愛だけは変わることはないのです。しかも、変わらないだけではなく、「決して滅びない」とも言うのです。そして、そのように決して滅びることがないものとして、13 節では、愛と共に信仰と希望が挙げられています。
　なぜここに、愛以外に、信仰と希望が挙げられているのでしょうか。一見すると、ここで突然、信仰と希望が出てきたように思いがちですが、実はそうではありません。既に 7 節で、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」とありました。そこに、信じ、望む、つまり信仰と希望が既に語られていたのです。そして、信仰と希望を挟み込むようにして、「忍ぶ」という言葉と「耐える」という言葉が語ら

れています。忍び、耐える。つまり忍耐です。
　愛は、忍耐することができるのです。なぜなら、今は不完全な愛が、やがて主の再臨の時に完全な愛に変えられると信じ、そのことを望んでいるからです。神さまが忍耐をもって、こんな私たちをこれほどまでに愛してくださっている。その愛を知らされ、その愛に生かされているからこそ、私たちは神の愛を信じる者とされ、神の愛に希望を持つ者とされるのです。それゆえに、神の愛がこの世界に満たされることを待つことが出来るのです。だからパウロは「その中で最も大いなるものは、愛である」と語るのです。

　この言葉を語った後で、パウロは「愛を追い求めなさい」と勧めています。ここで言う「追い求める」という言葉は、「限りなく追いかけていく」という強い意味を持った言葉です。教会が一つとされるために、最も大切な賜物である愛を限りなく追いかけていく。私たちの教会は、そのような教会でありたい。この創立記念日の時、そのことを心に刻んでまいりたいと思うのです。